

# 岩手県におけるヤマブドウの取り組み

岩手県林業技術センター 主任専門研究員 泉 憲 裕

## 1. 背景と目的

近年の自然健康食ブームによりヤマブドウに対する関心が高まっているが、原料となるヤマブドウは山どりが多く豊凶の影響を受けやすいことから、原料の安定確保を図るためヤマブドウの栽培化が望まれている。これまでヤマブドウは東北や北海道の一部地域で栽培され、ワインやジュースが商品化されているが、優良品種が育成には至っていなかった。そこで、岩手県林業技術センターでは多収性、高品質果汁性等の特性の明らかにしたヤマブドウ優良品種育成の試験を開始した。

## 2. 優良系統選抜の経過

平成3年～4年に県内各地のヤマブドウ野生株を60系統収集し、挿木により増殖した。得られた挿し木苗を平成5年に矢巾試験地、平成6年には滝沢試験地に植栽し、栽培管理を行った。矢巾試験地では平成8年、滝沢試験地では平成9年に結実が見られたので収量調査を行った結果、ヤマブドウの結実重量は遺伝的素質に支配されていることを明らかにした。収量調査のほか果汁成分分析や花粉調査の継続調査を行い、着果量の多い多収性6系統、高糖度低酸度の高品質果汁1系統、授粉能力の高い高授粉性1系統の合計8系統を選抜した。

## 3. 品種登録の申請と県オリジナル品種の開発

平成11年度に多収性1系統と高品質果汁1系統について特性調査をおこなったところ、品種登録の要件を満たしていることが明らかになった。そこで、ヤマブドウ岩手県オリジナル品種として「涼実紫」（すずみむらさき）と命名し農林水産省に品種登録の申請を行った（表2）。なお、ヤマブドウの品種登録事例はないため、全国で初めての登録品種となる。

表2 ヤマブドウ県オリジナル品種の特徴等

品種名	性	申請年月	特 徴
涼実紫1号	メス	平成12年3月	糖度が高く、酸度が低い
涼実紫2号	メス	平成12年3月	結実量が多い。着粒密度が高い
涼実紫3号	オス	平成13年3月	花粉が多い。花粉発芽率が高い。
涼実紫4号	メス	平成13年3月	結実量が多い。着粒密度が高い
涼実紫5号	メス	平成14年3月	結実量が多い。着粒密度が高い

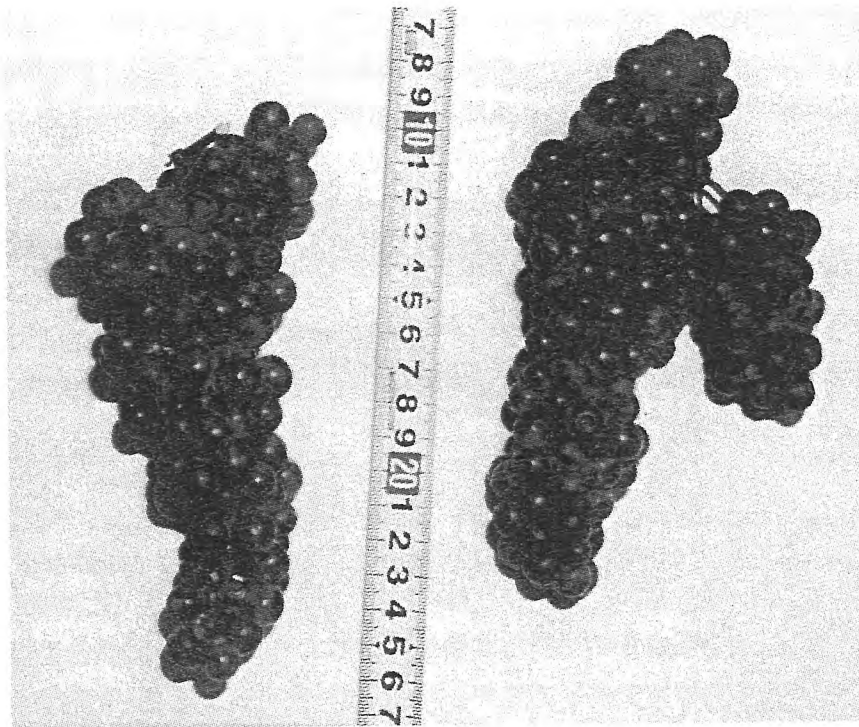


写真 多収性品種「涼実紫4号」の結実果房

#### 4. ヤマブドウを原料とした新商品の開発

ヤマブドウ関連商品として県内企業等によりワインやジュース等が販売されている。今回、県オリジナル品種が開発されたことにより、新たな県特産品化が期待されていることから新商品開発するため、県工業技術センターとの共同研究により、ワインの醸造試験を行った。その結果、醸造されたワインはヤマブドウ特有の黒紫色に仕上がりに、品種により酸味や甘みなど味の異なるワインとなった（表3）。また、果汁の減酸を目的として、果汁処理を加えた新しいヤマブドウワインの醸造方法の検討を行った。その結果、果汁加熱処理及び乳酸発酵処理ともに減酸効果が現れ、飲みやすくまろやかとの評価を受けた（表4）。

表3 醸造したヤマブドウワインの一般成分

品種名	アルコール (%)	比重	還元糖 (g/100ml)	pH	鉄分 (mg/l)
涼実紫1号	13.4	0.994	0.27	3.38	12.2
涼実紫2号	13.4	0.997	0.35	2.95	8.1

表4 果汁処理による新しいヤマブドウワインの一般成分

醸造条件	アルコール (%)	乳酸 (g/l)	リンゴ酸 (g/l)	短評
通常の醸造法	11.3	0.13	10.70	酸味、渋みがある
果汁加熱処理	12.4	0.12	11.12	香りくせ、飲みやすい
乳酸発酵処理	11.4	0.78	6.80	やや酸味あり、まろやか

注) 果汁加熱処理：発酵前の果汁を加熱処理

乳酸発酵処理：発酵後に乳酸菌を加え、乳酸発酵

## 5. 現地適応化栽培試験

平成12年度から県内全域を対象として各地における選抜系統の栽培適応性を実証するため「ヤマブドウ現地適応化栽培試験」を開始した(表5)。

試験では生育状況の調査をはじめとして、収量調査も行うこととしている。今後、収量調査結果を基に、現地におけるヤマブドウ優良系統の栽培適性を評価し、各地域の普及系統を決定することとしている。

表5 ヤマブドウ現地適応化栽培試験実施箇所

年度	実施市町村			
12	玉山村	安代町	室根村	遠野市
	岩泉町	久慈市	種市町	大野村
	山形村	野田村	浄法寺町	一戸町
13	松尾村	湯田町	東山町	遠野市
	宮古市	新里村	種市町	野田村
	普代村	二戸市	浄法寺町	一戸町
14	滝沢村1	滝沢村2	東和町	江刺市
	大東町	大船渡市	遠野市	宮古市
	岩泉町	田野畑村	山形村	二戸市
	一戸町	浄法寺町		

## 6. 今後の予定

### (1) 栽培技術の開発

現在ヤマブドウを栽培している生産者は、一般の栽培ブドウの慣行的な栽培方法を参

考にして栽培管理施業を実施している。栽培管理技術のうち、特に重要と思われるのが、病虫害の防除方法である。これらについては現在技術開発に取り組んでおり、早期に解決できるところまで研究が進められている。今後は栽培マニュアル等を早急に作成し普及指導に役立てたいと考えている。

## (2) 増殖技術の開発と苗木供給計画

一般にヤマブドウの増殖は困難であると言われているので、安定的にこれらの優良品種の苗木を供給するために増殖技術の開発が急務となっている。増殖技術開発については、得苗率の向上を目的として挿し木の試験をすすめてきたが挿し木の得苗率約 50 % とほぼ目途がたったので、穂木を効率的に採取するための採穂園を整備した。このことにより、優良品種の苗木を供給開始予定であった平成 16 年に一般供給できる目途がついた。

今後は、ブドウの主要害虫であるフィロキセラへの抵抗性獲得のため、抵抗性台木への接ぎ木の試験を行う予定である。